

防災意識の醸成と準備 対話を大事に、一人ひとり向き合うこと

追分第1町内会会長

工藤隆男さん

——町内会の防災活動について伺います。

追分第1町内会は安平町で最初に自主防災組織を立ち上げた町内会で、年に数回、防災に関する会議を開いています。昭和56（1981）年の台風では安平川が氾濫し、鉄道官舎が流されました。その経験が今の防災意識につながっています。町内会内には高齢者施設があり、まずお年寄りの避難を考えます。施設長を町内会役員に入れて体制を強化、リヤカーでお年寄りを避難所へ運ぶ訓練などを行ってきました。



工藤 隆男さん

民館に集まってください」と呼びかけると、6時には全員が集まり、すぐに炊き出しです。おにぎりの朝食を出しました。ほかの町内会の方もいましたが、みんなで助け合おうという空気でした。その後、避難所運営の中心を担うことになり、2週間ほど家に帰らずに対応しました。

方から、会話が生まれる声かけが大切だと教わり、「体調はどう？」と声をかけ、不安を和らげるために多くの人と少しでも話をしようと努めました。会話を必要を感じた時には、保健師につなげたりと。色々な方がいて、色々な考えがあります。一人ひとりと向き合うことを大事にしました。

——避難所運営はいかがでしたか？

停電・断水もありましたが、すぐに回復しましたし、避難所の公民館は第1町内会内にある施設なので、何がどこにあり何ができるかが全部わかっていたので、条件は良かったです。避難生活が続くと、食事への不満、ほかの避難者への不満と、様々な声が上がります。そんな時は、今は我慢しようと話しました。避難所運営で関わった

——その後はいかがでしょうか？
地震後、「震災ご苦労さん会」を始めました。70人くらい集まるんですが、お酒やお茶を飲みながら体験談を話してもらおう会です。防災を核としたコミュニケーションを続け、被災の記憶を風化させず、継続して訓練をやっていくことが大切です。みんなが知って、みんなが行動できるようにならないとと考えています。

——発災直後について教えてください。

地震が起きてすぐに副会長と事務長など5名で全戸を回り、皆さんに「避難所の公

人の思いやり、温かさを実感 より多くの方を助ける体制づくりを

追分第2町内会会長

小野寺 捷さん

——発災直後の状況について伺います。

経験したことのない大きな揺れで、つかまった柱が斜めに傾いて、家のきしむ音、食器の割れる音に言葉では表現できない恐怖を感じました。自主防災組織の委員長として見回りをしようとしたのですが、鍵が壊れ、外に出られない状態に。妻と斜めにつぶれたベランダの戸をこじ開け、やっと出られたのが1時間後くらいです。



小野寺 捷さん

すぐに近所を見回り、消防に連絡して閉じ込められた方を救出してもらいました。後日、自宅は全壊の判定を受けたのですが、築年数40年ほどの家は基礎から壊れてしまい、避難所生活を余儀なくされました。

——避難所生活はいかがでしたか？

避難所にいたのは地震の3日後から46日

間です。避難所を運営された方々はあらゆることで寄り添ってくれましたし、隣町の知人友人が心配して励ましに来てくれたりと、人の思いやり、温かさを感じることができましたね。本当にありがたかった。感謝しかありません。

同じ町民でありながら、これまで話したことがない人と話す機会が増えました。余儀なく始まった避難所生活でしたが、ずいぶんと視野が広がったように思います。避難所を出たあとも「元気かい」と声をかけ合っています。それだけでありがたいことだなと思いますし、人間の奥深さに改めて気づかされました。

令和元（2019）年の5月に北海道主催で胆振東部地震に関するシンポジウムが開催された際には、自分の経験・考えを伝えることで今後の災害対応に少しでも役に立てればと思い、今言ったようなことを発

表しました。

——ご自身の生活再建はいかがですか？

避難所からみなし仮設住宅に入りました。その後、被災者向けの融資を使って自宅を新築することができました。震災から約2年経過し、ようやく一息ついたと感じています。

——町内会の防災意識は変わりましたか？

防災倉庫を建てて、充電器やヘルメット、救急用品などを毎年少しずつ備蓄しています。町内会の人たちにも備えをしてもらいたいとすすめています。そのためは「まずは我々から」と役員間で話しています。自主防災組織を充実させ、万が一の時、より多くの方々を助けられる体制づくりを進めています。